

古文 助動詞これだけ100

解答・決め手

答えより、**決め手の一行**を覚えてください。

丸つけのしかた 答えが合っている、決め手が言えなければ×にしてください。

- ① 直前の活用形を見る 未然形接続か、連用形接続か、終止形接続か。ここで候補がほぼ絞れます。
- ② 直後を見る 体言が来れば連体形、句点で終われば終止形。活用形が決まります。
- ③ 訳して通るか確かめる 「～た」なら過去・完了、「～ない」なら打消、「～だろう」なら推量。

き 次の傍線部「し」を識別せよ。

1	我れ思ひ <u>し</u> こと、皆実となれり。	過去「き」連体形「し」	「思ひ」連用＋「し」＋体言「こと」。
2	友、来（こ） <u>しか</u> ば、酒酌み交はしけり。 次の傍線部「しか」を識別せよ。	過去「き」已然形「しか」（カ変例外）＋接続助詞「ば」（原因）	カ変「来」＋「しか」＋「ば」。
3	我れ昨日、京に行き <u>き</u> 。 次の傍線部「き」を識別せよ。	過去「き」終止形	「行き」連用＋「き」。文末で終止。
4	我れ若くあり <u>せば</u> 、いかにせまし。 次の傍線部「せ」を識別せよ。	過去「き」未然形「せ」＋接続助詞「ば」（反実仮想）	ラ変「あり」連用「あり」＋「せ」＋「ば」＋「まし」。
5	春 <u>し</u> くれば、花咲く。	副助詞「し」（強意、過去「き」ではない）	「春が来ると」を強める副助詞。
6	来 <u>し</u> 方。	過去「き」連体形「し」（カ変例外）	カ変「来」連用「き」＋「し」＋体言「方」。 「過ぎ去った（来た）方角・過去」。

けり 次の傍線部「ける」の用法を答えよ。

7	我が見 <u>ける</u> 世界、なほ夢のごとし。	過去	「見」連用＋「ける」＋体言「世界」。
8	我が思ふ人は、いまは帰り <u>けり</u> 。 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。	詠嘆（気づき）	「（自分が知らなかったが）今、帰っていたのだなあ」。
9	昔、男あり <u>けり</u> 。 次の傍線部「けり」の用法を答えよ。	過去（伝聞）	物語の冒頭定型。「（昔）男がいた」。伊勢物語の冒頭。
10	月清く照り <u>ければ</u> 、夜なほ明るし。 次の傍線部「けれ」の用法を答えよ。	過去「けり」已然形「けれ」＋接続助詞「ば」（原因）	「照り」連用＋「けれ」＋「ば」。
11	いと哀れと思ひ <u>けれど</u> 、口に出さず。 次の傍線部「けれ」の用法を答えよ。	過去「けり」已然形「けれ」＋接続助詞「ど」（逆接）	「思ひ」連用＋「けれ」＋「ど」。
12	その声、都までや聞こえ <u>ける</u> 。	過去・疑問（「や」の連体結び）	「や」係助詞→連体結び。

つ・ぬ 用法を答えよ。

13	春過ぎて夏来たりぬ。	完了「ぬ」終止形	「来たり」（ラ行四段動詞「来たる」＝やって来る、の連用形）＋完了「ぬ」終止形。
14	我れ歌詠みつるものを、人皆冷たし。	完了「つ」連体形「つる」	「つる」＋準体「ものを」（逆接）。
15	我れも詠みつべきを、いまだ詠まず。	強意「つ」終止形（「つべし」の形）	「べし」は終止形接続なので「つ」は終止形。「きっと詠めるはずなのに」。
16	古き世にありぬべき人。	強意「ぬ」終止形（「ぬべし」の形）	「べし」は終止形接続なので「ぬ」は終止形。「きっと～にちがいない」。
17	古典を学びぬべき時なり。	強意「ぬ」	「ぬ」＋「べき」。「きっと古典を学ぶべき時だ」。
18	春の野に若菜摘みつ。	完了「つ」終止形	「摘み」連用＋「つ」。

ぬ 次の傍線部「ぬ」を識別せよ。

19	来 <u>ぬ</u> 人を待つ宵の更けゆけば。	打消の助動詞「ず」連体形「ぬ」	「来（こ）」は力変未然形。
20	月の明かき夜、はかなく更け <u>ぬ</u> 。	完了の助動詞「ぬ」終止形	「更け」は下二段「更く」連用形。
21	静かに <u>ぬれ</u> ば、夢に故郷をぞ見る。	下二段動詞「寝（ぬ）」の已然形「ぬれ」	「静かに」＋下二段「寝」已然形「ぬれ」＋接続助詞「ば」。
22	夜更けて、人みな <u>ぬ</u> 。	下二段動詞「寝（ぬ）」の終止形	「ぬ」一語で「眠る」の意。
23	いと安らかに <u>ぬる</u> 夜なり。	下二段動詞「寝（ぬ）」の連体形「ぬる」	「安らかに」（＝穏やかに）＋下二段「寝」連体形「ぬる」＋体言「夜」。

ね 次の傍線部「ね」を識別せよ。

24	我が思ふこと言は <u>ね</u> ど、知らる。	打消の助動詞「ず」已然形「ね」	「言は」未然形＋打消已然形＋逆接「ど」。
25	早く立ち <u>ね</u> 、と道行く人を急がし給ふ。	完了の助動詞「ぬ」命令形「ね」	「立ち」連用形＋命令形＋引用「と」。
26	日暮れ <u>ぬれ</u> ば、家路を急ぐ。	完了の助動詞「ぬ」已然形「ぬれ」	「暮れ」連用形＋「ぬれ」＋ば（確定条件）。完了の已然形は「ぬれ」（「ね」は命令形）。打消なら「暮れねば」。
27	寝 <u>ね</u> ばや、と思へど、寝られず。	下二段動詞「寝（ぬ）」未然形「ね」	「寝（ぬ）」下二段未然形＋「ばや」（願望、未然形接続）。

ず 「ず」を識別せよ。

28	我れ仕うまつらずして、退きいづ。	連用形	「ず」＋「して」。
29	物のあはれを解せ <u>ざる</u> 人にあらず。	打消連体形	「解せ」（サ変未然）＋「ざる」＋体言「人」。

30	心ある人にあら <u>ね</u> ば、これを解せず。	打消已然形	「あら」未然＋「ね」＋「ば」。
31	物のあはれを知らぬ人にあら ず。	終止形	「あら」未然＋「ず」。「物のあわれを知らない人ではない」。
32	月見 <u>ぬ</u> 人、世になし。 次の傍線部「ぬ」を識別せよ。	打消連体形「ぬ」	「見」上一段未然＋「ぬ」＋体言「人」。

る・らる 用法を答えよ。

33	ある時は、御使ひに召し出ださる。	受身	「御使ひに召し出さる」＝御使いとして召し出される。受身。
34	月の出でぬるに、ふと見出ださる。	自発	「見出だす」 心情・知覚系。
35	その花、いとうつくしと見らる。	自発	「と見らる」＝自然とそう見える。知覚・心情の動詞＋る/らる＝自発が定石。
36	心定まらずして、なほ書かれず。	可能の打消	「書か」未然＋「れ」＋「ず」。
37	上、いみじう涙落とさせたまふ。	(参考) 使役/尊敬「す」＋「たまふ」(二重尊敬)	「落とす」は四段動詞なので、未然形「落とさ」に接続するのは「す」(未然形「せ」)。
38	中宮、御文書かせ給ふ。	(参考) 使役とも尊敬(二重敬語)とも取れる「せ給ふ」	させる相手が文中にあれば使役。なければ二重尊敬と取るのが定石。
39	字、読まれず。	可能(の打消)	「読ま」四段未然＋「れ」(る連用)＋「ず」。
40	帝、御文を書かせたまふ。	(参考) 尊敬「す」連用形「せ」＋尊敬「たまふ」(二重敬語)	「せ」は下に「たまふ」が続くので連用形。使役の相手が示されない「せたまふ」は二重尊敬。

す・さす・しむ 次の傍線部「させ」を識別せよ。

41	大臣、御簾の外に出で <u>させ</u> たまふ。	尊敬(二重敬語)	「出で」下二段未然＋「させ」＋「たまふ」。
42	主君、家臣に城を築か <u>しめ</u> たまふ。 次の傍線部「しめ」を識別せよ。	使役	「築か」未然＋「しめ」＋「たまふ」。
43	院、人々を集め <u>させ</u> たまひて、酒を飲ま <u>せ</u> たまふ。 次の傍線部「させ」「せ」をそれぞれ識別せよ。	ともに使役(前＝「さす」連用形、後＝「す」連用形)	「人々を集めさせ・飲ませ」＝させる相手がいる→使役。「せたまふ・させたまふ」でも文脈が使役なら二重尊敬ではない。
44	世の中にたえて桜のなかり <u>せ</u> ば、春の心はのどけからまし。 次の傍線部「せ」を識別せよ。	(参考) 過去「き」未然形「せ」(「せば～まし」＝反実仮想)	使役「す」との見分け：「せば～まし」の型は過去「き」の未然形(在原業平・古今集)。
45	院、御物の怪に取り憑か <u>せ</u> たまふ。 次の傍線部「せ」を識別せよ。	尊敬(二重敬語、もしくは受身的な表現)	「取り憑か」未然＋「せ」＋「たまふ」。
46	帝、人をして御文届け <u>させ</u> たまふ。	使役	「届け」下二段未然＋「させ」＋「たまふ」。

む 次の傍線部「む」の用法を答えよ。

47	春の野に咲か <u>む</u> 花、いまだ知らず。	婉曲	体言「花」前。「春の野に咲くような花を、まだ知らない」。
48	我れ、いま死な <u>む</u> ものを、と嘆く。	意志	「死な」ナ変未然＋「む」＋逆接「ものを」（～のに）。
49	唐土に渡ら <u>む</u> 人、すくなから <u>む</u> 。 次の2つの「む」の用法をそれぞれ答えよ。	前の「む」＝婉曲／後の「む」＝推量	下に体言が続く連体形の「む」は婉曲（～ような）。文末の「む」は推量。
50	我れ知ら <u>む</u> やと、人問ふ。	反語	一人称＋「むや」＝「私が知っているだろうか、いや知らない」。
51	君行か <u>む</u> ほどに、文書きてやらむ。	假定・婉曲	「むほどに・むこと・む人」＝連体形の「む」は假定・婉曲（行くとしたら、その時に）。
52	月清けき夜、歌詠ま <u>む</u> やは。	反語（「むやは」）	「やは」＝反語。詠もうか、いや詠むまい。

べし 次の傍線部「べし」の用法を答えよ。

53	我れ古都に住まひす <u>べき</u> ものなり。 次の傍線部「べき」の用法を答えよ。	当然	「私は古都に住むべきだ」（連体形＋「ものなり」）。
54	我れ、風流を解する人にはあらざる <u>べし</u> 。	推量	「あらざるべし」＝～ではないだろう。べしは終止形接続（ラ変型には連体形）なので打消は「ざるべし」の形。
55	我れもまた、その道を行く <u>べし</u> 。	意志	1人称。「私もまた、その道を行こう」。
56	君、おとなしくす <u>べし</u> 。	命令	2人称。「あなたはおとなしくしなさい」。
57	都に住む人、皆風雅を解す <u>べし</u> 。	推量・当然	「都に住む人は皆、風雅を解するに違いない／解するはずだ」。
58	あらゆる事、はかり知る <u>べからず</u> 。 次の傍線部「べから」の用法を答えよ。	可能（の打消）	「べからず」。「あらゆることは、はかり知ることができない」。
59	春の野に若菜を摘む <u>べし</u> 。	適當	「春の野で若菜を摘むのがよい」。
60	月の都の人ならば、いま帰る <u>べきぞ</u> 。 次の傍線部「べき」の用法を答えよ。	当然・適當	「月の都の人ならば、今帰るべきだ／帰るのがよい」。

まじ 用法を答えよ。

61	いみじき御学才、誰にも劣るまじ。	打消推量	「素晴らしい学才は、誰にも劣らないだろう」。
62	我れ、これより一歩も退くまじ。	打消意志	1人称。「私はこれより一歩も退くまい」。
63	ゆめゆめ、あらぬさまにふるまふ <u>まじ</u> 。	禁止	「ゆめゆめ～まじ」＝決して～するな。禁止。
64	あだなる契りはなすまじきものぞ。	当然・適當の打消（連体形）	「はかない約束はするべきでないものだぞ」。
65	いまだ若ければ、よろづ知るまじ。	不可能	「まだ若いので、すべてを知ることはできない」。

らむ 次の傍線部「らむ」の用法を答えよ。

66	螢の光、明らかなる <u>らむ</u> 草の上。	婉曲	体言「草の上」の前。「螢の光が明らかであるような草の上」。
67	行く春や、今ごろ何方に行く <u>らむ</u> 。	現在推量	「何方に」は場所の疑問詞。今ごろどこへ行っているのだろう、と現在を推量。
68	我れは知らねども、人は知る <u>らむ</u> 。	現在推量	文末で「人は今ごろ知っているだろう」（自分は知らないが、他人は知っているだろう）。
69	唐土に渡る <u>らむ</u> 人、なほ風雅を解す <u>らむ</u> 。 次の2つの「らむ」の用法をそれぞれ答えよ。	前の「らむ」＝婉曲／後の「らむ」＝現在推量	－最初の「らむ」：体言「人」の前 → 婉曲－後の「らむ」：文末 → 現在推量 「中国に渡るような人は、やはり風雅を解してい
70	月かたぶく <u>らむ</u> 夜半に、起きて見る。	婉曲	体言「夜半」の前。「月が傾いているような夜中に、起きて見る」。

けむ 次の傍線部「けむ」の用法を答えよ。

71	雪深く積もり <u>けむ</u> 山、いまだ青し。	婉曲	体言「山」の前。「雪が深く積もったとかいう山」。
72	古典作家、いかなる景色を見 <u>けむ</u> 。	過去推量（疑問）	「いかなる景色を」は内容の疑問。どんな景色を見たのだろう。
73	古代の宮、いにしへ何処にあり <u>けむ</u> 。	過去推量（疑問）	「何処に」は場所疑問詞であり、原因疑問詞ではない。
74	昔の人、月見ては歌詠み <u>けむ</u> 。	過去推量	昔の人、こうして詠んだのだろう、と過去を推量。

なり 「なり」を識別せよ。

75	古典の才ある人なりければ、皆敬す。	断定「なり」	体言「人」＋「なり」連用＋「けり」已然＋「ば」。
76	嵐の音、いまだ止まずなり。	伝聞・推定「なり」	「止まず」（打消ず終止）＋「なり」。
77	月の都に住む人なりけり、と聞く。	断定「なり」連用形	体言「人」＋「なり」連用＋「けり」終止＋引用「と」。
78	奥山に、鹿ぞ鳴く <u>なる</u> 。	伝聞・推定「なり」連体形「なる」	終止形「鳴く」＋なり＝音を根拠にした推定。「ぞ」の結びで連体形「なる」。
79	古典の道を究むる人なるべし。	断定「なり」連体形「なる」	体言「人」＋「なる」＋「べし」。
80	月の都の人なるを、世の人は知らず。	断定「なり」連体形	体言「人」＋「なる」＋準体「を」。

めり・らし・なり 次の傍線部「なり」は、ア～エのどれか。

81	軒の松に、風の渡る音 <u>すなり</u> 。 ア めり（視覚推定・婉曲）／イ なり（聴覚推定・伝聞）／ウ らし（根拠ある推定）／エ なり（断定）	イ	サ変「音す」終止形＋なり＝聴覚推定。「音がするようだ」。
82	この笛、世に名高き宝 <u>なり</u> 。 ア めり（視覚推定・婉曲）／イ なり（聴覚推定・伝聞）／ウ らし（根拠ある推定）／エ なり（断定）	エ	体言「宝」＋なり。断定。
83	病、日にそへて重る <u>めり</u> 。 次の傍線部「めり」は、ア～エのどれか。 ア めり（視覚推定・婉曲）／イ なり（聴覚推定・伝聞）／ウ らし（根拠ある推定）／エ なり（断定）	ア	「重る（終止）＋めり」。
84	（歌）富士の嶺に、雪はなほ降る <u>らし</u> 。 次の傍線部「らし」は、ア～エのどれか。 ア めり（視覚推定・婉曲）／イ なり（聴覚推定・伝聞）／ウ らし（根拠ある推定）／エ なり（断定）	ウ	「降る（終止）＋らし」。

85	山風に乗りて、遠く笛の音の聞こゆ <u>なり</u> 。 ア めり（視覚推定・婉曲）／イ なり（聴覚推定・伝聞）／ウ らし（根拠ある推定）／エ なり（断定）	イ	下二段「聞こゆ」終止形＋なり＝聴覚推定。
----	---	---	----------------------

まし 「まし」の用法を答えよ。

86	古典を読ま <u>まし</u> かば、心養はまし。	反実仮想	「まし（ましか）」は未然形接続。「読まましかば～まし」＝もし読んだならば。
87	いかなる宿世にかあら <u>まし</u> 。	ためらい・迷い（疑問語＋まし）	疑問語とともに用いる「まし」＝どうであろうかと迷う気持ち。
88	行かましやは。	ためらいの意志（「やは」の反語を伴う）	「行かましやは」＝行こうかしら、いや行くまい。
89	時戻るものならば、若き日に帰ら <u>まし</u> 。	反実仮想	「ならば～まし」＝もし時が戻るなら帰るだろうに。

じ

90	勝たんと打つべからず。 <u>負けじ</u> と打つべきなり。（徒然草） ア 打消推量／イ 打消意志／ウ 打消当然／エ 不適當	イ	「負けまい」と思って打つべきだ、の意。
91	「まじ」の意味はいくつあるか。 ア 2つ／イ 3つ／ウ 6つ／エ 1つ	ウ	「まじ」は6つ（打消推量・打消意志・不可能・打消当然・禁止・不適當）。
92	翁言ふやう、「この子はわれ守らむ。人手には渡さ <u>じ</u> 」と。 次の文の「渡さじ」の意味を選べ。 ア 打消意志／イ 打消推量／ウ 不可能／エ 打消当然	ア	話し手＝翁自身（一人称）→打消意志。
93	親のあらむ限りは、われはこの家を出で <u>じ</u> 。 次の文の「出でじ」の意味を選べ。 ア 打消推量／イ 禁止／ウ 不可能／エ 打消意志	エ	主語「われ」（一人称）→打消意志。

まほし・たし 次の文の訳として正しいものを選べ。

94	われは故郷へ帰りたし。 ア 私は故郷へ帰った。／イ 私は故郷へ帰るはずだ。／ウ 私は故郷へ帰りたい。／エ 私は故郷へ帰ってしまった。	ウ	たし＝希望「～たい」。話し手自身の希望。
95	この花を見まほし。	ア	まほし＝希望「～たい」。

ア この花を見たい。 / イ この花を見た。 / ウ この花を見るな。
 / エ この花を見るだろう。

96 次のうち接続が誤っているものを選べ。

ア 聞きたし / イ 聞きまほし /
ウ 聞かまほし / エ 聞きたき

イ

まほしは未然形接続なので「聞か+まほし」が正しい。

むず 次の傍線部を識別せよ。

97 さこそ思はむずれ、口には出ださず。

推量

係助詞「こそ」の結びで已然形「むずれ」、逆接で下が続く（「こそ+已然形、」の逆接用法。

98 われ、いかにもして本意遂げむず。

意志

「遂げ」は下二段未然形+「むず」。

ん

99 何の用にも立たじ。捨てんものを。

む（意志）の口語形

「捨て」（下二段未然）+「ん」。

100 心づくしの秋風、いかに吹くらん。

らむ（現在推量）の口語形

「吹く」終止+「らん」。